

第 1 週間 木曜日

早 課

第 6 カフィズマ (37-39、40-42、43-45 聖詠)

第 38 聖詠

われい われした もつ つみ おか ため わ みち つつし あくしゃ わ まえ あ あいだ
我言へり、我舌を以て罪を犯さざらん爲に、我が途を慎み、悪者の我が前に在る間、

わ くち つぐ われおうし ことば ぜんじ いえどもだ わ うれい なおうご わ ころ
我が口を箝まん。我唾にして言なく、善事と雖黙せり、我が憂は猶動けり。我が心

われ うち や わ おもい うち ひも われした もつ はじ い しゅ われ わ おわり
は我の中に蒸け、我が意の中に火焚えたり、我舌を以て始めて云えり、主よ、我に我が終

わ ひ かず いくばく つ われ わ よ いかん し み なんじわれ ひ あた
と我が日の數の幾何なるとを告げて、我に我が代の如何を知らしめよ。視よ、爾我に日を卑

ゆびじゃく ごと わ よ なんじ まえ あ ごと まこと およ い ひと まった むな
へしこと指尺の如く、我が代は爾の前に有るなきが如し。誠に凡そ生ける人は全く虚

まこと ひと ゆ まぼろし ごと かねいたづら いそがわしき たくわ だれ え し
し。誠に人は行くこと幻の如く、彼徒に煩劇をなし、貯へて誰に獲らるるを知

しゅ いまわれなに ま わ のぞみ なんじ あ われ わ ことごと ふほう のが
らず。主よ、今我何をか俟たん、我が望は爾に在り。我を我が悉くの不法より脱し、

われ ぐじん はずかしめ まか なか われおうし わ くち ひら なんじこれ な
我を愚人の辱に任す母れ。我唾となりて我が口を啓かず、爾是を爲したればなり。

なんじ だけき われ さ なんじ て う よ われほとん き も なんじせめ もつ ひと そのつみ
爾の打撃を我より去れ、爾の手の撃つに因りて我幾ど消ゆ。若し爾責を以て人を其罪

ため ばつ そのびれい むしばみ ごと ち まこと かな ひとみなむな しゅ わ きとう
の爲に罰せば、其美麗は蠹蝕の如くに散らん。誠なる哉、人皆虚し。主よ、我が祈祷を

き わ よ こえ みみ かたぶ わ なみだ もだ なか けだしわれ なんじ まえ たびびと
聆き、我が呼ぶ聲に耳を傾けよ、我が涙に黙す母れ、蓋我は爾の前に旅客たり、

きぐうしゃ わ れつそ ごと われ しりぞ われ よ さ ぼつ さき やす え
寄寓者たり、我が列祖の如し。我より退きて、我に世を逝りて没する先に安んずるを得し

たま
め給へ。

光荣は父と子と聖神に帰す、

誦經者の「光荣は」に続いて

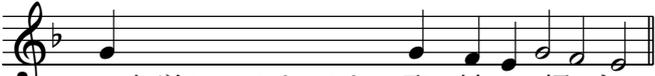


今も 何時も 世世に アミン アリルイヤ、アリルイヤ アリルイヤ

3回



神よ 光荣は なんじに 帰す 主 憐れめ 主憐れめ主憐れめよ、



光荣は 父と子と 聖神に帰す

誦經者の「今も」に続く

誦經、今も何時も世世に、「アミン」。

第40 聖詠

まず ものとぼ もの かえり ひと さいわい かんなん ひ しゅ かれ すく しゅ かれ まも
 貧しき者 乏しき者を 顧み みる人は 福なり、患難の日に 主は彼を救はん。主は彼を護り

そのいのち たも かれ ち あ ふく え なんじかれ そのてき のぞみ まか そのやまい
 て其生命を保たん、彼は地に在りて 福を得ん。爾 彼を其敵の望に任せざらん。其病の

とこ おい しゅ かれ たす そのやまい ときなんじまった そのとこ か われい しゅ われ あわれ
 榻に於て 主は彼を扶けん、其病の時 爾 全く其床を易へん。我言へり、主よ、我を憐

わ たましい いや たま われつみ なんじ え われ てき わ こと あくげん い
 み、我が 靈を癒し給へ、我罪を爾に得たればなり。私の敵は我が事を悪言して曰ふ、

かれ いずれ とき し そのなほろ も ひとわれ み ため きた いつわり い そのちゆうしん
 彼は 何の時に死して其名滅びん。若し人我を見ん爲に來らば 譎を言ひ、其中心に

ふぎ たくわ そと い これの われにく もの みなみみ あいせつ われ ざん あいはか われ
 不義を蓄へ、外に出でて之を述べ。我を憎む者は皆 耳を相接して我を讒し、相謀りて我

がい ほつ ことば かれ いた かれすで ふ またお あた われ した
 を害せんと欲す。ウェリアルの言は彼に至れり、彼已に臥し、復起る能はず。我と親し

もの わ たの もの わ パン くら もの またわれ むか そのくびす あ しゅ なんじわれ
 き者、我が恃みし者、我が餅を食ひし者も亦我に向ひて其踵を擧げたり。主よ、爾我

あわれ われ おこ たま われかれら むく も わ てきわれ か よろこ も なんじわれ
 を憐み、我を起し給へ、我彼等に報いん。若し我が敵我に勝ちて喜ばず、若し爾我を

まっと まも なんじ かんばせ まえ なが た われこれ もつ なんじ われ よろこ し しゅ
 全うして守り、爾が顔の前に永く立てば、我此を以て爾が我を悦ぶを知らん。主

かみ あが ほ よ よ いた
 イズライリの神は崇め讃められて世より世に至らん。「アミン」、「アミン」。

光荣は父と子と聖神に帰す、

誦経者の「光榮は」に続いて

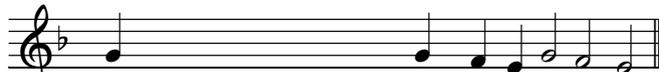


今も 何時も 世世に アミン アリルイヤ、アリルイヤ アリルイヤ

3回



神よ光榮は なんじに 歸す 主 憐れめ 主憐れめ主憐れめよ、



誦経者の「今も」に続く

光榮は 父と子と 聖 神に 歸す

誦経、今も何時も世世に、「アミン」。

第45 聖詠

かみ われら かくれが ちから かんなん とき すみやか たすけ ゆえ ち うご やま うみ
神は我等の 避所 なり、能力 なり、患難 の時には 速 なる 佐助 なり、故に 地は 動き、山は 海

こころ うつ われらおそ そのみず な さかま そのなみ よ やま ふる
の 心 に 移るとも、我等 懼れ ざらん。其 水は 號り 激 ぐべし、其 濤 たつ に 依りて 山は 震 ぶべ

かわ ながれ かみ まち しじょうしゃ せい すまい たのし かみ そのうち あ そ うご
し。河の 流 は 神の 邑、 至上者 の 聖 なる 住所 を 樂 ましたむ。神は 其中 に 在り、其れ 撼 かざ

かみ そうちょう これ たす しょみん さわ しょこく うご しじょうしゃひと こえ いだ
らん、神は 早朝 より 之を 佐 けん。諸民 は 騒 ぎ、諸國 は 撼 けり。 至上者 一 たび 聲 を 出

ち と ばんぐん しゅ われら とも かみ われら まも もの きた しゅ
せば 地は 融 けたり。 萬軍 の 主 は 我等 と 偕 にす、イアコフの 神 は 我等 を 護 る 者 なり。來りて 主

な こと そのち おこな ほろぼし み かれ ち はて たたかい や ゆみ お ほこ
の 爲し 事、其 地 に 行 ひし 掃 滅 を 視よ、彼は 地 の 極 に まで 戰 を 息 めて、弓 を 折り、矛 を

くじ ひ もつ いくさくるま や なんじらとどま われ かみ し われしょみん うち あが
折き、火を 以て 兵車 を 焚 けり。爾 等 止 りて、我の 神 なる を 識れ、我 諸民 の 中 に 崇め

ちじょう あが ばんぐん しゅ われら とも かみ われら まも もの
られ、 地上 に 崇め られん。 萬軍 の 主 は 我等 と 偕 にす、イアコフの 神 は 我等 を 護 る 者 なり。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮 は 父 と 子 と 聖 神 に 歸す、今も 何時も 世世に、「アミン」。

「アリルイヤ」「アリルイヤ」「アリルイヤ」、神よ、光榮は 爾 に 歸す。三次

主憐めよ。三次

<続けて>

齋1 セダレン 【坐誦讚詞】 第二の調

かみ ことば なんじ もんと そのでんきょう よ こうみょう しきよく あらわ われら こころ
神の 言 よ、爾 は 門徒 を 其 傳教 に 由りて 光明 として 四極 に 現 して、我等の 心 を

しょとく ひかり てら ものいみ もつ きよ なんじ しょぼく かいしん くやみ あた
諸徳 の 光 にて 照し、 齋 を 以て 淨 めて、 爾 の 諸僕 に 改新 の 悔 を 與 へたり、

きゆうせいしゅ ひとりいた じんじ もの なんじ さんえい ため
救世主、獨至りて仁慈なる者よ、爾を讚榮せん爲なり。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、「アミン」。

生神女讚詞、

しょうしんじょ われなんじ しゅご もと もの す なか わ たましいなんじ たの われ
生神女よ、我爾の守護を求むる者を棄つる勿れ、我が靈爾を待めばなり、我を

あわれ たま
隣み給へ。

<戻る。枠 P12、 50 聖詠>

齋2 【三歌經の規程】

第四歌頌 預言者アウワクムの歌句、アウワクム三章一至十九節

しゅ われなんじ ふうせい き おそ しゅ われなんじ わざ さと おどろ
右誦經句、主よ、我爾の風聲を聞きて懼れたり、主よ、我爾の作爲を悟りて驚けり。

しゅ なんじ しょねん あいだ なんじ わざ おこな しょねん あいだ これ あらわ いかり
左誦經句、主よ、爾は諸年の間に爾の作爲を行ひ、諸年の間に之を顯さん、怒

おい あわれみ きねん
に於て矜恤を記念せん。

かみ きた せい もの こかげしげ やま きた
右 句、神はフェマンより來り、聖なる者は樹蔭繁きファランの山より來らん。

そのいげん てん おお そのこうえい ち み
左 句、其威嚴は天を蔽ひ、其光榮は地に盈ちたり。

そのかがやき ひ ひかり ごと こうせん そくて い ここ そのちから ひそ ところ
右 句、其朗耀は日の光の如く、光線は其手より出づ、此處は其力の潜む所なり。

たましい せつせい あかつき う おのれ あきらか つみ くらやみ はな しんせい しん
左讚詞、靈よ、節制の暁を受けて己を明にし、罪の幽暗を離れよ、神聖の神

よ しゃめん ひかり なんじ たら ため
に因りて、赦免の光の爾を照さん爲なり。

なんじ なんじ たみ すくい ため い なんじ あぶら もの すく ため のぞ
右 句、爾は爾の民の救の爲に出で、爾の膏つけられし者を救はん爲に臨めり。

いざな もの いつらく つり もつ われ ひ うば とりこ な しか ことば もつ
左讚詞、誘ふ者は逸樂の釣を以て我を引きて、奪ひて擄と爲せり。然れども言を以

せかい あみ しとら われ そのどくあく のが たま
て世界を咎せし使徒等よ、我を其毒悪より脱れしめ給へ。

なんじ ふけんしゃ いえ かしら くだ これ そのもとい うえ いた あらわ
右 句、爾は不虔者の家の頭を碎き、之を其基より上に至るまで露せり。

そんえい しとら なんじら こうえい ひ かがやき あらわ まよい くらやみ しりぞ
左 句、尊榮なる使徒等よ、爾等は光榮の日の輝と現れて、迷の幽暗を退けたり。

もろもろ あく くら われ てら たま
諸の悪に昧まされたる我をも照し給へ。

われしゅ ため よろこ わ すくい かみ ため たのし
右 句、我主の爲に喜び、我が救の神の爲に樂まん。

どうていじょ われ とりでおよ ふじよ もの われくるし よる ひる なんじ よ
左 生神女讃詞、童貞女、我の堡及び扶助なる者よ。我迫められて、夜も晝も爾に呼び

すく なんじ ちから まも いつらく のが
て救はれ、爾の力に護られて逸樂を脱れん。

しゅかみ われ ちから
右 句、主神は我の力なり。

しとら なんじら ぎ ひ いた かがや ひかり ち せかい てら まよい くらやみ
左 讃詞、使徒等よ、爾等は義の日の至りて輝ける光として、地の世界を照して、迷の幽暗

しりぞ
を退く。

かれ わ あし しか ごと われ たか ところ のぼ
右 句、彼は我が足を鹿の如くならしめて、我を高き處に登らしめん。

しとら なんじら きゅうせいしゅ しん な きんしつ ち し われら ため
左 讃詞、使徒等よ、爾等は救世主の神に鳴らさるる琴瑟として地に知られ、我等の爲に

みょうおん うた うた せかい かみ むか
妙音の歌を歌ひて、世界を神に向はしむ。

こうえい ちち こ せいしん き
光榮は父と子と聖神に歸す、

聖三者讃詞、

われらゆいいち せい おい さんしゃ さんえい ゆいいち しゅ かみ うま ちち うま
左 我等唯一の性に於て三者を讃榮して、唯一の主・神たる、生れざる父、生れ

こ およ せいかつ せいしん うた
たる子、及び生活する聖神を歌はん。

いま いつ よよ
右 句、今も何時も世々に、「アミン」。

生神女讃詞、

しゅ どうていじょ はら なんじ う けだしなんじ ひと あい しゅ
左 主よ、童貞女は孕みて、爾エムマヌイルを生めり。蓋爾は人を愛する主よ、

なんじ たみ すくい ため なんじ あぶら もの すく ため のぞ
爾の民の救の爲、爾の膏つけられし者を救はん爲に臨めり。

右 句、われら^{われら} かみ^{かみ}の 神^神よ、 光^{こうえい}榮^{なんじ}は 爾^きに 歸^きす、 光^{こうえい}榮^{なんじ}は 爾^きに 歸^きす。

左 讃^{じゅうに}詞^{しと}、 十^{しんせい}二^{いとうと}の 使^{もの}徒^{もと}、 神^{われら}聖^{ため}に して 最^{いの} 尊^{われ}き 者^{いの}よ 求^{われ}む、 我^{われ}等^{われ}の 爲^{われ}に ハリ^{われ}ス^{われ}ト^{われ}スに 祈^{われ}りて、 我^{われ}

等^{われ}に 疲^ら なく 四^ら十^{つかれ}日^{しじゅうにち}の 程^{みち}を 度^{わた}らしめ 給^{たま}へ。

(詠) [イルモス]主よ、爾が摂理の作為は預言者アワクムを驚かせり、蓋爾は爾の救いの為に出で、爾の膏つけられし者を救わん為に臨めり。

第4歌頌

主よ 爾が 摂理の わ ー ざは 預 言 者 アワクムを
せつり 作為

驚 か せ り 蓋、爾は爾の民の救いのために出で

爾のあぶらつけられしものを救わんためにのぞめり

【小連禱】

我等復又安和にして主に禱らん。

(詠) 主憐めよ。

神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救ひ憐み護れよ。

(詠) 主憐めよ。

至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。(詠) 主爾に司祭高聲 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。(詠)「アミン」

主あわれめよ 主 なんじに アミン

第八歌頌 三少者の歌句、ダニイル三章五十七至八十八節

右 誦^{しゅ}經^{ことごと}句^{ぞうぶつ} 主^{しゅ}の 悉^{あが} くの 造^ほ物^{かれ}は 主^{うた}を 崇^{よよ}め 讚^ほめよ、 彼^あを 歌^あひて 世^あ世^あに 讚^あめ 揚^あげよ。

左 誦^{しゅ}經^{しよてんし}句^{しゅ} 主^{しよてん}の 諸^{しゅ}天^{あが}使^ほ、 主^かの 諸^{うた}天^{よよ}は 主^ほを 崇^あめ 讚^あめよ、 彼^あを 歌^あひて 世^あ世^あに 讚^あめ 揚^あげよ。

右 句^{しよてん} 諸^{うえ}天^あの 上^{みず}に 在^{しゅ}る 水^{ばんぐん}、 主^{しゅ}の 萬^{あが}軍^ほは 主^かを 崇^{うた}め 讚^{よよ}めよ、 彼^あを 歌^あひて 世^あ世^あに 讚^あめ 揚^あげよ。

左 句^ひ 日^{つき}と 月^{てん}と、 天^{ほし}の 星^{しゅ}は 主^ほを 讚^あめ 揚^あげよ、 彼^あを 歌^あひて 世^あ世^あに 讚^あめ 揚^あげよ。

右 句 ^{てん もろもろ とり やじゅう いっさい かちく しゅ あが ほ かれ うた よよ ほ あ}
天の 諸の鳥、野獣と一切の家畜と主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世世に讃め揚
げよ。

左讃詞、我等凡の逸樂より 齋して、^{われらおよそ いつらく ものいみ ものいみ もつ ころ こや つと しょうかん のみもの}
齋を以て心を肥し、務めて傷感の飲料を
^{の うた しゅ ぞうぶつ しゅ あが ほ}
飲みて歌はん、主の造物は主を崇め讃めよ。

右 句 ^{ひと しょうし しゅ あが ほ みんな しゅ あが ほ かれ うた よよ ほ}
人の諸子は主を崇め讃めよ、イズライリ民は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世世に讃
^あ
め揚げよ。

左讃詞 ^{しとら とも ひとびと しんぼん ため ぎ とき われおお つみ よ}
使徒等よ、ハリストスと偕に人人を審判せん爲に坐する時、我多くの罪に因り
^{ていざい もの みぎ た あずか もの な いの たま}
て定罪せらるべき者が右に立つに 與る者と爲らんことを祈り給へ。

右 句 ^{しゅ しさいら しゅ しょうぼく しゅ あが ほ かれ うた よよ ほ あ}
主の司祭等、主の諸僕は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。

左讃詞 ^{われらものいみ きよ しんせい しょうとく くるま のぼ てん たか おもい は}
我等 齋に潔められて、神聖なる諸徳の車に登り、天の高きに思を馳せて
^{うた しゅ ぞうぶつ しゅ あが ほ}
歌はん、主の造物は主を崇め讃めよ。

右 句 ^{しょうしん しょうせいじん たましい しょうぎじん ころ けんび もの しゅ あが ほ かれ うた}
諸神と諸聖人の 靈と、諸義人と心の謙卑なる者と主を崇め讃めよ、彼を歌
^{よよ ほ あ}
ひて世世に讃め揚げよ。

左讃詞 ^{どうていじょ なんじ しんせい ひ う や もの とど ひとりよろこび}
童貞女よ、爾は神性の火を生みて、焚かれざる者として止まれり、獨喜悦の
^{げんいん もの てんし こえ もつ ちゅうしん なんじ うた もの たましい しょうよく や たま}
原因たる者よ、天使の聲を以て忠信に爾を歌ふ者の 靈の諸慾を焚き給へ。

右 句 ^{しゅ あが ほ かれ うた よよ ほ あ}
アナニヤ、アザリヤ、ミサイルは主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。

左讃詞 ^{われらせいしん ラッパ もんと さんしょう よ しゅ ぞうぶつ しゅ あが}
我等 聖神の角たるハリストスの門徒を 讃頌して呼ばん、主の造物は主を崇め
^ほ
讃めよ。

右 句 ^{しゅ しょうしと よげんしゃ ちめいしゃ しゅ あが ほ かれ うた よよ ほ あ}
主の諸使徒、預言者、致命者は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。

左讃詞 ^{われら もんと せかい ため きとう ものおよ いざない しりぞ もの うた}
我等ハリストスの門徒を世界の爲に祈祷する者及び誘惑を退くる者として歌ひ

よ 呼ばん、^{しゅ ぞうぶつ しゅ あが ほ}主の造物は主を崇め讃めよ。

右 句 ^{われらしゅ ちち こ せいしん あが ほ}我等主なる父と子と聖神とを崇め讃めん。

聖三者讃詞

左 ^{われらちち こ せいしん おい しせい さんしゃ さんしょう うた しゅ ぞうぶつ しゅ あが}我等父、子、聖神に於て至聖なる三者を讃頌して歌はん主の造物は主を崇め
^ほ讃めよ。

右 句 ^{いま いつ よよ}今も何時も世に、「アミン」。

生神女讃詞

左 ^{いさぎよ もの われらひとびとみななんじ い がた さん うた けいけん よ しゅ ぞうぶつ}潔き者よ、我等人人皆爾の言ひ難き産を歌ひて敬虔に呼ばん、主の造物は
^{しゅ あが ほ}主を崇め讃めよ。

右 句 ^{われら かみ こうえい なんじ き こうえい なんじ き}我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

左 讃詞 ^{しとら われら きよめ ひ へいあん お いの たま けだしわれらよ しゅ}使徒等よ、我等が潔淨の日を平安に終へんことを祈り給へ、蓋我等呼ぶ、主の

^{ぞうぶつ しゅ あが ほ}造物は主を崇め讃めよ。

(詠) 我等主を讃め、崇め、伏し拝みて、世々に歌い讃めん。

[イルモス]ハリストスよ、克肖なる爾の少者は爐の中に歌いて云えり、主の悉くの造物は主を崇め讃めよ。

第8歌頌

我等神を^{あがほ}崇め讃め^{ふおが}伏し拝みて 世々にうたい^ほ讃めん

ハリストスよ、爾の^{こくしょう}克肖なる^{しょうしゃ}少者はいろりの

^{うち}中に歌いて云えり 主の^{ことごと}悉くの造ぶつは

主をあがめほめよ

第8 歌頌のイルモスの後

しょうしんじょひかり はは ほめうた もつ ほ あ
司祭 生神女 光 の母を讃歌を以て讃め揚げん。

(詠) [ヘルビムの歌] 我が心は主を崇め、我が^{たましい}靈は神我が救主を悦ぶ。

附唱 ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え、貞操を破らずして神言を生みし、実の生神女たる爾を崇め讃む。

第1句
我が心は主を あがめ 我が靈は神我が救主を 喜こーぶ

附唱
ヘルビムより 尊とく セラフィムに並びなく さかえ 貞操を

破らずして神言を生みし 実の生神女たる 爾をあげ讃む

第2句 その婢の卑しきを顧み給へり、今より萬世我を福なりと言はん、

→ヘルビムより尊く

第3句 権能を持ち給へるものは、我が為に大なる事を為せり、其の名は聖なり、其の憐れみは
世世 彼を畏るる者に臨まん

→ヘルビムより尊く

第4句 其の肘の力を表して、心の驕れるものを散らし給へり、

→ヘルビムより尊く

第5句 権ある者を位より斥け、卑しき者を上げ、飢うる者を善に飽かせ、富める者をむなしく
帰らせ給へり。

→ヘルビムより尊く

第6句 其の僕、イズライリを納れて、我が先祖に告げしが如く、アウラアムと其の裔を世世に
憐れむ事を記憶し給へり、

→ヘルビムより尊く

第九歌頌 聖ザハリヤの歌句、ルカ六十八至七十九節

右誦經句 しゅくさん かな しゅ かみ けだしそのたみ かえり これ あがない な
祝讃 せらるる哉、主イズライリの神、蓋 其民を眷みて、之に贖を爲し、

左誦經句 われら ため すくい つの そのぼく いえ おこ
我等の爲に 救の角を其僕ダウィドの家に興せり、

右 句 こせい そのせい よげんしゃ くち もつ い ごと
古世より其聖なる預言者の口を以て言ひしが如し、

左 句 すなわちわれら わ しよてきおよ およ われら にく もの て すく
即 我等を我が諸敵及び凡そ我等を悪む者の手より救ひ、

右 句 以て^{もつ} 矜恤^{あわれみ} を我が先祖^わに^{せんぞ} 施^{ほどこ}し、其^{そのせい} 聖^{やく}なる約^{すなわちわ}、即^そ 我が祖^{ちか}アウラムに^{ちか} 矢^{ちか}ひたる

誓^{ちかい} を記念^{きねん}せん、

左讃詞 舵^{かじ}を操^とる主^{しゅ}よ、我^{われ} 逸樂^{いづらく} の深^{ふか}き海^{うみ}に^{おぼ} 溺^なれて、爾^{なんじ} が慈憐^{じれん}の淵^{ふち}を呼^よぶ、我^{われ}を救^{すく}ひ 給^{たま}へ。

右 句 謂^いふ、我等^{われら}に我^わが 諸敵^{しよてき} の手^てより救^{すく}はれし後^{のち}、懼^{おそれ} なく、彼^{かれ}の前^{まえ}に在^ありて、聖^{せい}を以^{もつ}て

義^ぎを以^{もつ}て、生涯^{しやうがいかれ} 彼^{つか}に事^{つか}へしめんと。

左讃詞 慈憐^{じれん}の泉^{いずみ}よ、我^{われ}に今^{いま} 傷感^{いしょうかん} と歎息^{たんそく} とを與^{あた}へ給^{たま}へ、我^わが惡^{あく}の測^{はか}られぬ海^{うみ}の故^{ゆえ}に哭^な

かん爲^{ため}なり。

右 句 子^こよ、爾^{なんじ} も至上^{しじょうしや}者^{よげんしや} の預言^{とな}者^{けだししゅ}と稱^{めんぜん}へられん、蓋^ゆ 主^{そのみち}の面^{そな}前^{そな}に行^ゆきて、其^{そのみち} 道^{そな}を備^{そな}へん。

左讃詞 イイススよ、爾^{なんじ} の門徒^{もんんと}の尊^{とうと}き 禱^{いのり} に因^よりて、我^{われ}に爾^{なんじ} の尊^{とうと}き復^ふ活^{かつ} 及^{およ}び 爾^{なんじ} の

神聖^{しんせい} なる 苦^{くるしみ} に伏拜^{ふくはい} する^{あた}ことを與^{たま}へ給^{たま}へ。

右 句 彼^{かれ}の民^{たみ}に、其^{その} 救^{すくい} は即^{すなわち} 諸罪^{しよざい} の赦^{ゆるし} にして、我^わが神^{かみ}の矜恤^{あわれみ} に因^よることを知^しらしめん。

左生神女讃詞、神^{かみ}が 爾^{なんじ} の内^{うち}に住^{すま}ひしに因^よりて、我等^{われら}の地^ちの合性^{ごうせい} を天^{てん}の物^{もの}と爲^なしし 至^{いた}りて 玷^{きず}

なき者^{もの}よ、衆人^{しゅうじん} を苦難^{くなん}より 救^{すく}ひ 給^{たま}へ。

右 句 此^この矜恤^{あわれみ} に因^よりて、東旭^{あさひ}は上^{うへ}より我等^{われら}に臨^{のぞ}めり。

左讃詞 使徒^{しとら}等は預言^{よげん}の如^{ごと}く 救世主^{きゅうせいしゅ} の泉^{いずみ} より不^ふ死^しの水^{みず}を汲^くみて、渴^{かわ}く者^{もの}に常^{つね}に生命^{せいめい}の

おしえ の 教^{おしえ} を飲^のましむ。

右 句 幽暗^{くらやみ} と死^しの蔭^{かげ} とに坐^ざする者^{もの}を照^{てら}し、我等^{われら}の足^{あし}を平安^{へいあん}の道^{みち}に向^{むか}はしめん 爲^{ため}なり。

左讃詞 使徒^{しとら}等は天^{てん}の王^{おう}の軍將^{ぐんしょう} と現^{あらわ}れ、全世界^{ぜんせかい}を従^{したが}はしめて、獨^{ひとり} 彼^{かれ}を神^{かみ}として 敬^{うやま}

ひ、拜^{おが}み、讚榮^{さんえい} せしむ。

右 句 光榮^{こうえい} は父^{ちち}と子^こと 聖神^{せいしん} に歸^きす、

聖三者讃詞

左 わか さんしゃ ぜんのおぜんりよく ゆいいちしゃ ちち こ せいしん なんじ われ かみ しゅ
分れざる三者、全能 全力 の唯一者、父、子、聖神よ、爾は我の神、主、
および光なり、我爾を歌ひて伏し拜む。

右 句 いま いつ よよ
今も何時も世に、「アミン」。

生神女讃詞

左 ははおよ きよ どうていじよ われらよよ なんじ さんよう けだしなんじ きゆうせいしゅおよ
母及び浄き童貞女よ、我等世は爾を讃揚す、蓋爾は救世主及び
ぞうぶつしゅ い がた う せかい きよめ な
造物主を言ひ難く生みて、世界の潔浄と爲れり。

右 句 われら かみ こうえい なんじ き こうえい なんじ き
我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

左讃詞 した かい なんじ さんしょう もの すく かれら しょうかん じょう もつ ひかり ほどこ
使徒の會よ、爾を讃頌する者を救へ、彼等を傷感の情を以て光を施す
ものいみ ことごと ひ おく た もの な たま
齋の悉くの日を送るに任ふる者と爲し給へ。

地に生れし者の生命は一日なりと曰へり、愛を以て勞する者の爲には四十日の齋あり、
われらよろこ
我等喜びて之を送らん。

(詠) [イルモス]ハリストスよ、我等爾の至りて無・なる潔き母を崇め讃む、蓋彼は天性に超えて、身にて爾我
等を凡の誘惑及び腐敗より救う者を生み給えり。

第9歌頌

ハリストスよ、我等爾の至りて 無てんなる潔き 母 は を
あがめ 讃 - む 蓋、彼は 天性に 超 えて
身にて な - - - ンじ われ等を およそいざない 凡の誘惑及びほろびより
すく う も の を 生 み た ま え り

齋3

くづけ スティヒラ
【挿句の 讃頌】

<繰り返し略、本来は第1のスティヒラを2回>

句) 主よ、夙に爾の憐を以て我等に飽かしめよ、然せば我等生涯歡び樂しまん。

爾我等を撲ちし日、我等が禍に遭ひし年に代へて、我等を樂しましめ給へ。願はくは

爾の工作は爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其諸子に著れん。

主よ、爾の量り難き慈憐に因りて、我不當の者を救はんと欲して、爾は我罪人に痛悔

を勧め給へり。伏し拜みて爾に祈る、齋を以て我が靈を抑制せよ、我爾獨

至りて慈憐なる者に趨り附きたればなり。

句) 願はくは主吾が神の恵は我等に在らん、願はくは我が手の工作进行を我等に助け給へ、

我が手の工作进行を助け給へ。

致命者讃詞、

聖なる致命者よ、爾等は善き戦を戦ひて、死の後にも星の如く世に光る、勇敢を

有ちて、ハリストスに我等の靈の救はれんことを祈り給へ。

光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、「アミン」。

生神女讃詞、

生神女、凡そ爾に祈る者の轉達よ、我等爾に因りて勇み、爾を以て誇る、我が

悉くの恃は爾に在り、爾より生れし者に爾の不當なる諸僕の爲に祈り給へ。

六時課

齋4

【預言のトロパリ】第一の調

しゅ われら み み てき すく たま いほうじん かれら かみ いづく あ い
主よ、我等を見ゆると見えざるとの敵より救ひ給へ、異邦人が彼等の神は安に在ると云

はざらん ため しゅさい かれら なんじ く ひとびと つみ と はざる さと たま
はざらん爲なり。主宰よ、彼等に爾が悔ゆる人人の罪を問はざるを悟らしめ給へ。

司祭 つつし き
謹みて聴くべし。

誦經 ボロキメン
提綱、第一調、第十三聖詠、

しゅ そのたみ とりこ かえ
主は其民の虜を返さん。



主よ、その民の とりこを か - - え さん

誦經 句) むちなるものは其心そのころに神かみなしと謂へり。(詠)繰り返す

誦經 しゅ そのたみ
主は其民の

詠隊 とりこ かえ
虜を返さん。

司祭 えいち
睿智。

誦經 よげんしょ よみ
イサイヤの預言書の讀。第二章十一至二十一節。

司祭 つつし き
謹みて聴くべし。

誦經、

か ひひとりしゅ たか あが けだししゅ ひ およ たか もの おご もの およ たか
彼の日獨主のみ高く擧らん。蓋主サワオフの日は、凡そ高ぶる者、驕る者、凡そ高

く擧げられたる者に臨みて、此等卑くせられん、又リワンの高く聳えたる凡ての栢香木、

ワサンすべの凡ての橡かしの樹き、凡ての高たかき山やま、凡ての起おこりたる陵おか、凡ての高たかき戍樓やぐら、凡て

の堅固けんごなる垣かき、ファルシスの凡ての舟すべ、及び其凡ての慕ふねふべきおよ飾そのすべに臨したまん。彼の日人かざり のぞ か ひひと

の威嚴いげんは墜おとされ、人の高ひときは卑たかくせられ、獨ひく主ひとりしゅのみ高たかく擧あがらん、且かつ偶像ごうは悉ことごとく滅ほろ

しゅ た ち やぶ とき ひとびとかれ おそ そのいげん こうえい さ いわ ほら ち
びん。主の起ちて地を壊らん時、人人彼を畏れ、其威嚴の光榮を避けて、巖の洞と地の

あな い か ひひと みづか おが ため つく そのぎん ぐうぞう およ そのきん ぐうぞう
穴とに入らん。彼の日人、自ら拜まん爲に造りし其銀の偶像、及び其金の偶像を、

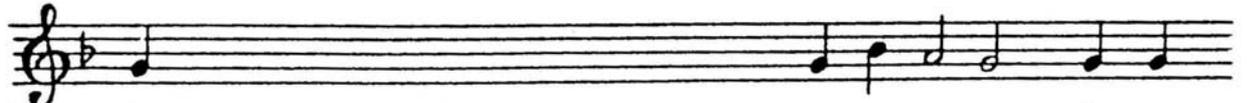
うごろもち こうもり な しゅ た ち やぶ とき かれ おそ そのいげん こうえい さ
鼯鼠と蝙蝠とに投げん、主の起ちて地を壊らん時、彼を畏れ、其威嚴の光榮を避けて、

いわ あいだ やま ほら い ため
巖の間と山の洞とに入らん爲なり。

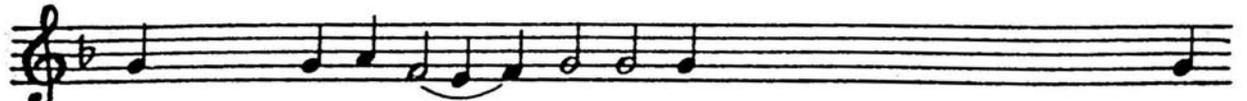
<→柀へ戻る P36>

晩 課

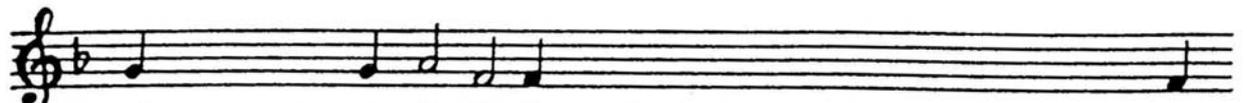
齋 5 ステイヒラ 【主よ、爾によぶの 讃頌】、2 調



主や汝に呼ぶすみやかに我れにいたりたまえ 主や



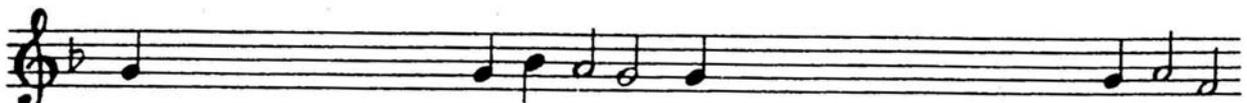
我れに聞きたま え主やなんじに呼ぶすみやかに



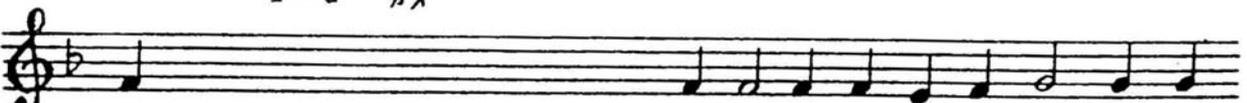
我れにいたりたまえ汝に呼ぶ時我が祈りの声をいれた



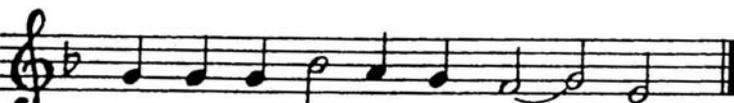
ま え主やわれにききたま えねがわくは我が



いのりは香炉ユーロの香りのカオごとく汝がかんばせの前にのぼり



我が手をあぐるはくれの祭のごとくいれられん主や



われにききたま え

誦經 しゅ わ くち まもり お わ くちびる もん ふせ たま わ ころよこしま ことば
主よ、我が口に衛を置き、我が唇の門を扞ぎ給へ、我が心に邪なる言

かたぶ ふほう おこな ひと とも つみ いいわけ なか
に傾きて、不法を行ふ人と共に罪の推諉せしむる母れ。

わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの わ いのり そのまえ そそ わ うれい その
我が聲を以て主に籲び、我が聲を以て主に禱り、我が禱を其前に注ぎ、我が憂を其

まえ あらわ わ たましいわれ うち よわ とき なんじ われ みち し わ ゆ みち おい
前に顯せり。我が靈 我の衷に弱りし時、爾は我の途を知れり、我が行く路に於て、

かれら ひそか わ ため あみ もう われみぎ め そそ ひとり われ みと もの われ
彼等は 竊 に我が爲に網を設けたり。我 右に目を注ぐに、一人も我を認むる者なし、我

のが ところ わ たましい かえりみ もの しゅ われなんじ よ い なんじ われ
に遁るる 所なく、我が 靈 を 顧 る者なし。主よ、我 爾 に呼びて云へり、 爾 は我の

かくれが い もの ち おい われ ぶん わ よ き たま われはなはだよわ
避所なり、生ける者の地に於て我の分なり。我が籟ぶを聴き給へ、我 甚 弱りたればな

り、我を迫害する者より救ひ 給へ、彼等は我より強ければなり。

わ たましい ひとや ひ いた われ なんじ な さんえい たま
我が 靈 を 獄より引き出して、我に 爾 の名を讃榮せしめ給へ。

句) しゅ も なんじふほう ただ しゅ たれ よ た しか なんじ ゆるし ひと
主よ、若し 爾 不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども 爾 に赦あり、人

に 爾 の前に 敬 まん爲なり。

わ たましい ひとや ひ いた われ なんじ な さんえい たま
我がハリストス、昔 十字架に懸りて日を味まし、赦免の眞の光にて 明 に信者を

てら しゅ われたたか もの まどわし くら もの てら たま わ なんじ いましめ ひかり
照しし主よ、我 戦 ぶ者の迷惑にて味まされし者を照し給へ、我が 爾 の 誠 の光の

うち ゆ いさぎよ なんじ ふかつ すくい あかつき いた ため
中を行きて、 潔 く 爾 の復活の救の 暁 に至らん爲なり。

句) われしゅ のぞ わ たましい しゅ のぞ われかれ ことば たの
我主を望み、我が 靈 は主を望み、我彼の言を待む。

ハリストス 救世主 よ、 爾 は葡萄の如く木に懸りて、不朽の酒を地の四極に飲ましめ

たり。故に我呼ぶ、 救世主 よ、我常に罪の酔にて 甚 しく味まされし者に眞の

しょうかん あまみ の いまいつらく ものいみ かた たま なんじ ぜん ひと あい
傷感の甘味を飲まして、今 逸樂より 齋 するに固め給へ、 爾 は善にして人を愛す

る主なればなり。

他の讃頌 聖フェオドルストウディトの作。 同調。

句) わ たましいしゅ ま ばんにん あさ ま ばんにん あさ ま はなはだ
我が 靈 主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより 甚 し。

ああ なんじ じゅうじか ちから かれ きょうかい ため せつせい はな ひら お
嗚呼 爾 の十字架の力や、彼は 教會 の爲に 節制の花を開き、エデムに於けるアダム

の不節制を根より抜けり、此は 昔 人人に死を攜へたり、彼は常に世界の爲に不死を流す、

けだしかれ らくえん た いずみ ごと いのち ほどこ なんじ ちおよ みず しゅう よ
蓋 彼よりして 樂園の他の 泉 よりするが如く、生命を 施す 爾 の血及び水、衆が因

りて活かされたる者を注げり、イズライリの神、大なる 憐れ 有つ者よ、彼を以て我等

ため ものいみ しょく あま
の爲に 齋 の食 を甘くせよ。

	その週の調の生神女讃詞	八調経
1		

<聖入なし、続けて誦経で>

せい ふく じょうせい てん ちち せい こうえい おだや ひかり
聖にして福たる 常生 なる、天の父の聖なる 光榮の 穩 かなる 光 イイスス・ハリストス

われらひ いり いた くれ ひかり み かみちち こ せいしん うた いのち たま かみ こ
や、我等日の入に至り、晩の 光 を見て、神 父と子と 聖神 を歌ふ。生命を賜ふ神の子や、

なんじ いつ けいけん こえ うた ゆえ せかい なんじ あが ほ
爾 は何時も 敬虔の 聲にて歌はるべし、故に世界は 爾 を崇め讃む。

齋 6 【ポロキメン】

輔祭 謹みて聴くべし。

誦経 ポロキメン
提綱、

我は我が悟りを啓きし主を讃め揚げん。(4調)

(句) 神よ、我を護り給へ、我爾を恃めばなり。

晩1-木1 (4調)



我は 我が 悟りを 啓きし 主を 讃-めあげん

司祭、えいち
睿智。

誦経、そうせいき よみ
創世記の讀。(2:4-19)

司祭、つつし き
謹みて聴くべし。

誦経誦す、

1 大齋第1週奉事式ではすべて1調で代用している。本来はその週、その曜日の生神女讃詞。または月課経のその日の生神女讃詞。

こ てんちそうぞう き すなわちしゅかみ てんち つく およ すべ の そうもく いま ち あ
是れ天地創造の記なり、即主神が天地を造り、及び凡ての野の草木、未だ地に在ら

ざりし者、凡ての野の草蔬、未だ生ぜざりし者を造りし日の事なり、維の時主神は未

だ雨を地に降さず、亦地を耕す人なかりき、霧は地より上りて、遍く地の面を潤せ

り。主神は地の塵を以て人を造り、生命の氣を其面に嘘き入れたり、人即生ける

たましい な しゅかみ ひがし かた その う つく ひと かしこ おきたり しゅかみ
靈と爲れり。主神は東の方エデムに園を樹えて、造りたる人を彼處に置きたり。主神

は觀るに美しく、食ふに善き諸の樹を地より生ぜしめ、又園の中に生命の樹、及び

善惡を辨ち知る樹を生ぜしめたり。河はエデムより出でて園を潤し、彼處より分れて

四と爲れり。其第一は名をフィソンと云ふ、此れはエウフラトの全地を洶る者なり、彼處に

金あり、此の地の金は善し、彼處に又紅玉及び碧玉あり。第二の河の名はゲランと云

ふ、此れはエフィオピヤの全地を洶る者なり。第三の河はティグルと云ふ、此れはアッシ

リヤの東に流るる者なり。第四の河はエフラトなり。主神は造りたる人を挈りて、彼を

樂園に置きたり、之を理め、之を守らん爲なり。主神はアダムに戒めて曰へり、園に

在る凡ての樹の果は、爾意に任せて之を食へ、然れども善惡を知る樹は、爾其果を

食ふ母れ、蓋爾之を食ふ日には必死なん。主神又曰へり、人獨居るは善からず、

我等彼の爲に彼に適ふ助者を造らん。神又土より野の凡ての獸と、天空の凡ての鳥

とを造りて、之をアダムの前に率い至れり、其如何に之を名づくるを見ん爲なり、アダム

が凡ての生物に名づけし所は、皆其名と爲れり。

輔祭 謹みて聴くべし。

誦經 ポロキメン、

主よ、我を眸子の如く護り給へ。(4調)

(句) 主よ、私の直きを聴き給へ。

斎7

くづけのスティヒラ

【挿句讃頌】

4調

てん お もの われめ あ なんじ のぞ み ぼく めしゅじん て のぞ ひ めしゅふ
句) 天に居る者よ、我目を擧げて爾を望む。視よ、僕が目主人の手を望み、婢の目主婦

て のぞ ごと われら め しゅわ かみ のぞ そのわれら あわれ ま
の手を望むが如く我等の目は主吾が神を望みて其我等を憐むを俟つ。

われら 我等エギプトよりせずしてシオンより きた しんせい なる「パスハ」にあずか ほと つうかい
我々エジプトよりせずしてシオンより来る神聖なる「パスハ」に與らんと欲して、痛悔を

もつ つみ パンダネ た いつらく じょう ころ もつ わ こし つか およそ あくどう さまた
以て罪の酔を断ち、逸樂の情を殺すを以て我が腰を束ね、凡の悪道を妨ぐる

くつ もつ た かざ しん つえ もつ おのれ かた しゅさい じゅうじか てき なら はら かみ
履を以て足を飾り、信の杖を以て己を固め、主宰の十字架の敵に効ひて腹を神とす

すなわちものいみ もつ あくま か われら しめ わ たましい きゅうしゅ したが
ることなく、乃 齋を以て悪魔に勝つことを我等に示し我が靈の救主に従は
ん。

しゅ われら あわれ われら あわれ たま けだしわれら あなどり あ た われら たましい
句) 主よ、我等を憐み、我等を憐み給へ、蓋我等は侮に贖き足れり。我等の靈は

おご もの はずかしめ ほこ もの あなどり あ た
驕る者の辱と誇る者の侮とに贖き足れり。

致命者讃詞、

なんじ ちめいしゃ きおく もつ さんえい かみ かれら きとう われら おおい
爾が致命者の記憶を以て讃榮せらるるハリストス神よ、彼等の祈祷に因りて、我等に大

あわれみ こうむ たま
なる 憐を 蒙らしめ給へ。

こうえい なんじちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、「アミン」

十字架生神女讃詞

しゅ なんじ はは なんじ じゅうじか てい み おどろ い こ なん あらわれ
主よ、爾の母は爾が十字架に釘せられしを見て、驚きて曰へり、此れ何の顯見ぞ、

しあい こ ふしんふほう たみ なんじ おお きせき たのし もの か ごと もつ なんじ むく
至愛の子よ、不信不法の民、爾が多くの奇跡を樂みし者は此くの如きを以て爾に報

しゅさい こうえい なんじ い がた かんよう き
ゆるか。主宰よ、光榮は爾の言ひ難き寛容に歸す。